

2021 年度

海外フィールド・スタディ報告書

超域イノベーション博士課程プログラム

8 期生

鈴木 寛太郎 工学研究科

冷 昕媛 人間科学研究科

9 期生

王 滢鵬 言語文化研究科

勝久 美月 医学系研究科

齊前 裕一郎 医学系研究科

花木 愛子 工学研究科

三宅 萌 人間科学研究科

担当教員

金森 サヤ子 CO デザインセンター

小川 歩人 国際共創大学院学位プログラム推進機構

目次

1. 概要	4
1.1. 学習目標	4
1.2. インドネシアについて	5
1.3. 協力団体	6
1.4. 授業実施時期	7
1.5. 活動の概要	8
2. 日程表	9
3. 活動報告	10
3.1. 2 日目午前：Ubad Bali Farm ・ I Putu Wiraguna 氏	10
3.2. 2 日目午後：ハバタク株式会社 ・ 小原祥嵩氏	12
3.3. 3 日目午前：Bali Life Foundation ・ Piter Panjaitan 氏	14
3.4. 3 日目午後：Kelecung Village ・ Aniek Puspawar Dani 氏	16
3.5. 4 日目午前：プロジェクト STOP ・ Abid Kamalsyah 氏	18
3.6. 4 日目午後：株式会社 RECOTECH ・ 坂内智恵氏	20

3.7. 5 日目午前：ブミ・セハット国際助産院・Robin Lim 氏.....	22
3.8. 5 日目午後：PKP コミュニティセンター・イブ・サリ氏	24
4. 個人総括	26
4.1. 見る・考える・創りだすー充実した六日間を通してー 王滢鵬	26
4.2. 気持ちの変化と FS での学びをどのように活かしていくか 勝久美月	29
4.3. FS から何を学んだか 齊前裕一郎	32
4.4. 社会課題とどう向き合っていくのか 花木愛子	34
4.5. FS 海外研修を終えて 三宅萌	37
4.6. 社会課題を解決する方法に対する理解と自身の取るべき姿勢 鈴木寛太郎	40
4.7. FS でわかった社会変革の力 冷昕媛	43
5. 謝辞	45
6. フォトギャラリー	46

1. 概要

担当：勝久美月

海外フィールド・スタディ（以下 FS）は、以下のことを目的としている¹。

- 国境を越えて異なる文化や価値観に向き合う姿勢を体得すること
- 異なる分野から参加している履修生の専門性を生かしながらグローバルな諸問題を発見し、それらに実践的に取り組む力を養うこと
- 自分たちが生まれ育ち、慣れ親しんだ社会や文化を客観的に捉え直すこと
- 異なる文化的、政治的、社会的、経済的な背景を持つ人びとと共に考え、解決に向かって取り組むために必要なコミュニケーション力、柔軟性といった資質を養うこと
- 多角的な視点をもって思考し、複雑な現実のなかで行動できる力を養うこと
- 諸問題に取り組む意欲を喚起し、より深く現実を見つめる姿勢を養うこと

1.1. 学習目標

学習目標として、以下の3点の達成を目指す。

- 異なる政治、経済、社会、文化的背景をもつ社会や人びとの立場を理解すると共に、共通点も見出し、物事を多角的視点から捉えることができるようになる。
- 自分の専門性を生かしながら、異なる立場の人と協働する姿勢を持つことができるようになる。
- 海外での経験から学んだことをもとに、自分自身が慣れ親しんだ社会や文化を相対化して理解できるようになる。

¹ 以下目的・目標については2021年度「海外フィールド・スタディI」シラバスより抜粋。

1.2. インドネシアについて

インドネシアは日本と同じ島国で、17,000 以上もの島からなり、300 以上もの民族が共存している国である。人々の習慣・伝統文化、宗教、風土や自然環境も多種多様である。このような国は世界でも稀である。熱帯性気候に属し、一年を通じて平均気温は 25 度以上。乾季（4～9 月）と雨季（10～3 月）の 2 つの季節がある。時差は、西部のジャワ島が日本から 2 時間遅れ、中部のバリ島は 1 時間遅れ、東部は日本との時差はない²。

バリ島は、インドネシアの中部、ジャワ島の東に位置している。COVID-19 流行以前、バリ島南部は観光地として世界中から観光客が訪れていた。バリ島における観光開発と観光産業の発展は、バリ人に多くの雇用を生み出し、貧困者を減少させることに成功した。しかし、南部の観光地とそれ以外の地域の所得格差は大きいこと、農業用地もホテル建設などへの開発が進められていたことが問題として挙げられる³。

基本情報

インドネシア ⁴		バリ島 ²
約 192 万 km ² （日本の約 5 倍）	面積	約 5,561 km ²
約 2.67 億人	人口	約 390 万人
マレー系が大半を占める （約 300 種族）	民族	バリ人が大多数を占める
インドネシア語	言語	インドネシア語（公用語）、バリ語
イスラム教 86.7%、キリスト教 10.7%、ヒンドゥー教 1.7%、 その他 0.9%	宗教	バリ・ヒンドゥー教が 90%、 その他（イスラム教、キリスト教、 仏教など）10%



インドネシアの地図²

² インドネシア共和国観光クリエイティブエコノミー省, <https://www.visitindonesia.jp/index.html> (2021 年 6 月 28 日参照)

³ 足立浩一(2015).バリ島における観光開発が伝統社会に及ぼす影響に関する考察.福山大学経済学論集.39(1,2), 73-90.

⁴ 外務省,国・地域情報インドネシア共和国基礎データ, <https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/indonesia/index.html> (2021 年 6 月 28 日参照)

1.3. 協力団体

協力機関である一般社団法人 Earth Company⁵は、今回の FS でファシリテーターとして私たちのサポートだけでなく、事前・事後学習にも関わってくださった。Earth Company 共同代表の濱川知宏さん、プログラスマネージャーの藤本亜子さん、Andi Junila Aulia さんが主に私たちをサポートしていただいた。この報告書では親しみをこめて、研修中と同じく、Tomo さん、Ako さん、June さんと記載させていただきたい。お三方とも、ゲストスピーカーの方々同様パッションに満ち溢れており、今回の FS に対する姿勢などのメンタル面でも支えていただいた。

Earth Company は、「この地球は、先祖から継承したのではなく、私たちの子供たち、子孫から、借りているのである」というネイティブ・アメリカンの格言を活動指針として掲げている。大切な人たちのために、地球をさらに良くして返さなければならないという理念のもと、「次の世代につなぐ未来」を創造し、社会変革を起こす「人」と「団体」を支援・育成すべく、以下の 4 つの事業を行っている。

• IMPACT HERO 支援事業

社会課題を解決するだけでなく、持続可能な社会を創り出すことのできるチェンジメーカーを 1 年に一人「IMPACT HERO」として選出する。選出された IMPACT HERO の活動を 3 年間金銭面、マーケティング面など様々な面で支援している。

• ソーシャル研修事業

世界中から起業家、デジタルノマドが集まる場所として、グローバルに注目を集めているバリ島において、個人、大学、企業向けに革新的な試みの最前線が体験できる研修プログラムやスタディツアーを実施している。

• コンサルティング事業

社会変革に挑む事業や団体を対象にその組織のニーズや課題に沿ったコンサルティングを提供し、より大きな社会インパクトを創出できるよう、サポートしている。

• エコホテル事業 (Mana Earthly Paradise)

泊まるだけで社会貢献ができる次世代のエコホテルを運営している。「泊まる」「食べる」「使う」という面で、エコやソーシャルな暮らしが体験でき、それらの暮らしとの親和性、利便性を実感できる。例えば、観光客として大型ホテルに泊まると水を大量に使用することになり、地元の人の農業に影響が出ている。しかし、Mana Earthly Paradise では、施設内で使う水は全て雨水を利用することでこういった影響が出ないようにしている。

⁵ 一般社団法人 Earth Company については下記公式ホームページ情報も参照。 <https://www.earthcompany.info/ja/>. (2021 年 6 月 28 日参照)

1.4. 授業実施時期

FS は、事前学習、6 日間のオンライン研修、事後学習で構成されている。それぞれに関して簡単に記載する。

• 事前学習

事前学習は、2020 年 10 月 2 日～2021 年 1 月 29 日に実施された。学習内容としては、まず、「2030 SDGs カードゲーム」を行い、さまざまな価値観や違う目標を持つ人がいる世界において、SDGs の壮大なビジョンをいかにして実現していくかについて学習した。次に、観察と情報収集を学ぶために、大阪大学敷地内をグループごとに訪問し、その方法を模索した。その後、インドネシアの宗教的、民族的な多様性、COVID-19 による影響を含む概要を学び、Tomo さんより Earth Company やインドネシア・バリが抱える問題についてレクチャーを受けた。インタビュー実習では、超域イノベーション博士課程プログラムの先生方に各自でインタビューを行い、インタビューを実施する際の配慮や進め方などを体験した。海外渡航中の健康管理、リスク・マネジメントでは、現地でのトラブルに対する具体的な対処法を学んだ。

• オンライン研修

2021 年 2 月 20 日～25 日の計 6 日間実施した。インドネシア各地からの参加者と超域イノベーション博士課程プログラム履修生の 8 期生、9 期生計 20 名で参加した。様々な社会問題に携わるゲストスピーカーが自身の活動を紹介し、その後参加者同士でのグループディスカッションにおいて、学びをまとめた。詳細は、2.以降において述べる。

• 事後学習

事後学習は、2021 年 4 月 9 日の Tomo さん、Ako さんを交えた振り返り、4 月 16 日の担当教員と 9 期生での振り返りの 2 回を実施した。9 期生それぞれが、異なることを FS で感じ取っており、自身の学びを深める機会となった。5 月 14 日には、Tomo さん、Ako さん、超域イノベーション博士課程プログラムの教員への活動報告会を実施し、フィードバックをいただいた。

1.5. 活動の概要

前年度と今年度は、COVID-19 の影響により、現地への渡航が叶わなかった。そのため、オンライン研修の実施となった。インドネシアから9名、超域イノベーション博士課程プログラム8期生6名、9期生5名が参加した。なお、8期生に関しては、博士課程後期に進学した2名が報告書作成に携わった。参加者の詳細に関しては、付録に記載する。



最終日（2021.02.25）の様子

1日の始まりは、5分間のメディテーション（瞑想）から始まった。スピーカーの講義は1日に2人ずつあり、1日の振り返りをして終了となる。各スピーカーの講義後にはグループワークがあり、スピーカーの組織の役割や、事業のユニークなところ、自分たちがこの組織にできることについて議論した。日々の振り返りでは、学んだこと、心を動かされたこと、心に残った言葉について振り返った。研修中にはFacebookグループコミュニティも作成され、昼休憩の際には昼食の写真をシェアし合うなど、互いの文化を知るきっかけにもなっていた。

2. 日程表

担当：齊前裕一郎

2021年2月20日～25日の計6日間実施した。

日程	内容
2021.02.20	AM: 自己紹介 PM: Social Innovation について
2021.02.21	AM: バリ島・農村が抱える社会課題（農村農業） PM: 日本の地方都市の社会課題（少子化、過疎化、農業・担い手不足）
2021.02.22	AM: バリ島の社会課題（貧困、環境、ジェンダー問題） PM: バリ島の農村の観光開発と住民理解
2021.02.23	AM: バリ島の廃棄物問題と解決策 PM: 日本の廃棄物問題とインドネシアとの関係
2021.02.24	AM: バリ島のジェンダー問題と女性就労・教育支援 PM: バリ島の産科医療と健康
2021.02.25	AM: 振り返り、発表準備 PM: プレゼンテーション

	1 日 目	2 日 目	3 日 目	4 日 目	5 日 目	6 日 目
午前	オリエンテーション 自己紹介	bad a il Farm I Putu iraguna 	a li ife Foundation Piter Panjatitan 	STOP Project M.Abid amalsyah 	P P Community Center Ibu Sari 	まとめ
午後	Earth Company Tomo 	Habataku oshitaka Ohara 	elecung Village Aniek Puspawardan i 	Recotech Chie annai Ei o aki 	u mi Sehat Foundation Robin im 	発表 プレゼンテーション

日程表とゲストスピーカー

3. 活動報告

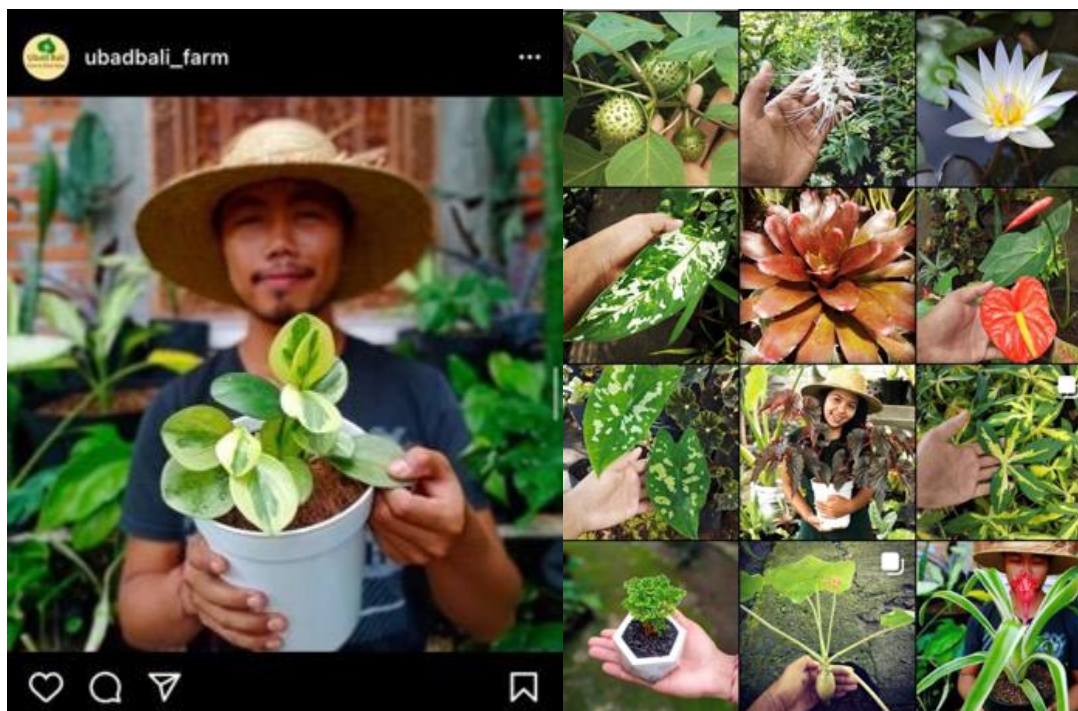
3.1. 2 日目午前：Ubad Bali Farm・I Putu Wiraguna 氏

担当：勝久美月

I Putu Wiraguna (Wira) 氏について

bad ali Farm の創始者。もともとは、バリの農村を保護し、教育するための持続可能な観光プログラムである Five Pillar Foundation、Five Pillar Experiences という活動を行っていた。しかし、COVID-19 の影響で、バリの観光業は大打撃を受け、従事していた多くの人々は自身の出身地に帰らざるを得ない状況となった。ira 氏も同様に、自身の村に帰った。そこで、バリが与えてくれた多くの資源に気づき、bad ali Farm を開始し、バリの人々にハーブや植物の重要性を教える活動を始めた。

彼は COVID-19 の流行を“Pandemic is a gift”と表現していた。「COVID-19 の流行があったからこそ、地元に戻ることができ、考える時間ができた」と話した。また、「不確定なものを待つのではなく、なにか始めることが大事だ」と教えてくれた。COVID-19 の状況をプラスに捉えている彼のポジティブな考え方はとても印象深かった。



ira 氏と bad ali Farm⁶

⁶ bad ali Farm 公式 Instagram アカウトによる 2020 年 12 月 21 日および 2021 年 1 月から 4 月までの投稿より抜粋。

https://instagram.com/ubadbali_farm?utm_medium=copy_link. (2021 年 6 月 28 日参照)

Ubad Bali Farm と Wira 氏の挑戦

Ubad Bali Farm では、医療の技術が発達し、昔は活用されていたが現在まで使用されていなかったハーブや薬草の栽培を行っている。

彼が挑戦の一つとして挙げていたことが、地域住民、特に若者に対する意識付けだ。彼らが Wira 氏の育てているハーブや薬草の資源としての有効性や重要性に気づき、利用し、次の世代にもその伝統や価値の継承が行われることを目標としている。そのための方法として、人と人の関わりを一番大切にしているように感じた。彼は、実際に訪れた人のトラブルを聞き、栽培しているハーブや植物の物から最適なものを選ぶ。そして、ただ症状に合わせたハーブや植物を渡すだけでなく、使用方法や効き目などのストーリーも一緒に伝えている。相手と対話をすることで、相手のより深い理解に繋がる。一見、時間や手間を要することに思えるが、人の意識を変えろということはこのような労力が必要不可欠なのだと学んだ。

なぜ植物に興味をもったのか

彼は、幼いころから祖父母と暮らしており、全て自然のものを使っていた。すぐに様々な植物や野菜を手に入れることのできる環境にいた。毎日、農場に行き、市場で植物を売り、魚や肉と交換していたという。このような環境は非常に恵まれているということを若者に気付いてもらうことが必要であると語った。

彼は、幼稚園の頃から植物を集めることが好きだった。育っていく様子を見てみると、エネルギーをもらえろと言う。今回の COVID-19 の流行により、植物に焦点を当てる時間ができたという。彼の話からは、彼が植物を好きなのか画面越しでも伝わってくる熱意を感じた。

3.2.2 日目午後：ハバタク株式会社・小原祥嵩氏

担当：三宅萌

初めに

ハバタク株式会社⁷の共同代表である小原祥嵩氏から、事業の一つである「シェア・ビレッジ」プロジェクトのご説明をいただいた。本プロジェクトは、1)過疎状態の田舎の活性化と、2)共同体からの孤絶を感じている都会の若年層に対するコミュニティの提供という二点の社会課題を、デジタルテクノロジーの活用によって同時に解決することを図るものである。このプロジェクトは kedama 株式会社というベンチャー企業との合同プロジェクトとして実施されており、デジタル／アナログの両領域で展開される。



「シェア・ビレッジ」プロジェクトのモデルケース：東北での村民の宿泊所外観

「シェア・ビレッジ」プロジェクト

基調となるコンセプトは、「村があるから村民がいるのではなく、村民がいるから村ができる」というもので、まず人が集まること、そして人間関係が形成されるという出来事それ自体が重視されていると言える。そして、都心の若年層を確保するためのアイデアの一つが、プロジェクト全体に浸透するキャッチーな名称である。

「シェア・ビレッジ」プロジェクトへの参加は、まずオンライン上でそれぞれ独自の色を持つ「村（地域）」を見つけ、その「村民」として登録することから始まる。登録した村には実際に（オフラインで）訪問することができ、訪問の頻度によって「ブロンズ村民（ブロンソン）」から「シルバー村民（シルソン）」、「ゴールド村民（ゴルソン）」と順々にランク

⁷ ハバタク株式会社および「シェア・ビレッジ」プロジェクトについては下記ホームページ情報も参照。
<http://habataku.co.jp>. (2021 年 6 月 28 日参照)

アップしていくことができる。参加者は、様々な地域から登録した他の村民と共に「蛍狩り」など自然を生かした課外活動を楽しむことができるほか、「寄合」と呼ばれる飲み会にも参加できる。目玉イベントとしては年に一度「一揆」と呼ばれるお祭りが存在し、そこでは「村歌（ソング）」を合唱する。秀逸であるのが、この「村」は「年貢」と呼ばれる年会費の納入で運営されるサブスクリプション制を取っており、年貢納入時期には「そろそろ年貢の納め時です」というメール通知が来るのだという。

プロジェクトの意義

このように、オンラインとオフラインを融合した新たなコミュニティ・サービスが「シェア・ビレッジ」プロジェクトであり、参加者は「村」を収斂点として自らのネットワークを自在に拡大していくことができるのである。本プロジェクトではあえて「村」や「寄合」といった、見方によっては一種のネガティブイメージが付着しているような言葉が使われているが、この「シェア・ビレッジ」プロジェクトの利用者の拡大と共に日本語の意味体系がアップデートされれば、現在「古臭く」「年寄り臭い」イメージを持つ過疎地域の田舎の活性化にも間接的な仕方で良い効果を与えることができるに違いない。



お祭り「一揆」の様子

3.3.3 日目午前：Bali Life Foundation・Piter Panjaitan 氏

担当：王滢鵬

はじめに

オンライン研修の3日目に、ali if e Foundation⁸の創設者である Piter Panjaitan 氏にお話をいただいた。ストリートチルドレンだった Piter 氏は、PO 組織に助けられたため、児童福祉分野に人生をかけ、より多くの子どもや家庭を救うことを目指して活動されている。Piter 氏は Impact Hero Jury Award 2017 や Indonesia Leadership GO Awards 2018 など、多くの賞を受賞されている。



Piter 氏

Bali Life Foundation について

ali if e Foundation は、2008 年に設立された、バリ島や他地域の女性や子供たちのために、様々な支援を行っている非営利団体である。ali if e Foundation は「子供事業」と「コミュニティ事業」を中心としつつ、Children's Home、Street Kids Centre、Woman's Workshop、Suwung Community Centre、Community Project、Disaster Relief といったさまざまなプロジェクトを展開している。今回は主に Street Kids Centre について Piter Panjaitan 氏に情報提供いただいた。その後の質疑応答では、ali if e Foundation の成長の軌跡についてもお話いただいた。

Street Kids Centre の設立背景

バリ島は世界著名な観光地であると同時に、多くの人々が極度の困窮で暮らしている。火山の噴出や旱害などの自然災害により、農作業に被害が発生する時期において、観光地が集結するバリ島南部には、路上で物乞いをしているストリートキッズが激増する。ストリートキッズは、肉体的、精神的、および性的な虐待の危険に特に晒されており、その大半は路上での物乞いや労働を大人から強制され、搾取されている。物乞いがうまくいかないと、軽犯罪に走る子供と仕事やお金がより確実に得られるセックスワーカーになる子供も増える。子供たちは、十分に教育を受けていないため、ただそれを比較的容易な稼ぎ方として考えている。子供た



Street Kids Centre の子供たち

⁸ ali if e Foundation については下記ホームページの情報も参照。<https://www.balilife.org/streetcentre/>. (2021 年 6 月 28 日参照)

ちにとってこれは恐ろしいことであり、さらに、約 30 万人の HIV/AIDS 患者がいるインドネシアは世界で 25 番目に感染被害の大きい国であることが指摘されている。

Street Kids Centre の活動内容

ストリートキッズをなくすために、Bali Life Foundation は、教育や仕事の機会を通じて子供たちやその親たちに力を与えることを活動の方針として、Street Kids Centre を設立した。このセンターには Street Kids Informal School と Bali Life Women's Workshops という 2 つの主なプログラムがある。

Street Kids Informal School には、2 つの教室、図書室があり、様々な年齢層の子供たちが集まって学んでいる。また、子供たちが子供らしく過ごせるために、広い遊び場や庭もある。将来的に、Informal School は正規の学校卒業資格を取得したい子供たちや有意義な仕事に就きたい年長の子供たちのため、教室の増加と職業訓練を行うことを目指している。

センターには、子どもたちの母親を対象とした Bali Life Women's Workshops もある。ストリートキッズをなくすために、その親たちが収入を得ることが重要である。Women's Workshops は、母親たちが手工芸や雑貨を作る場所であり、その手工芸品の多くは、世界中で販売されている。母親が毎日働けることによって、子供たちが路上で物乞いをしなくて済む。このプログラムの将来的なビジョンは、若者にもトレーニングを提供し、より大きな事業に拡大することである。

Piter Panjaitan 氏の話

研修の中で、Piter 氏に Bali Life Foundation が経験した困難などを語っていただいていた。その中に、彼と彼のチームは命の危険にさらされている老人を発見し、病院に連れて治療を受けさせようとしていたが、その家族から強く反対されており、数日後、老人は亡くなったという話があった。「人の考え方を変えるのは難しいです。たとえ必死に人助けをしようとしても、助けてもらいたくない人もいます」と Piter 氏が語っており、「深い無力感を抱いていた頃もあるが、諦めることなく、挑戦し続けることしかできない」と意思表示をしていた。

また、Bali Life Foundation が目指す将来の目標について、Piter 氏はこう話していた。「もし問題が単なる貧困であれば、援助をしますが、問題が虐待などであれば、それは別の問題が絡んできます。しかし、信頼関係を築き、教育を行うことは有効的だと考えています。そこで、生活支援と子どもや母親への教育をベースに、ストリートキッズの増加や児童虐待の発生を抑えようとしています。以前は、すべての子どもたちを救うという考えでしたが、今は家族の大切さを信じています」。

3.4.3 日目午後：Kelecung Village・Aniek Puspawar Dani 氏

担当：花木愛子

Aniek Puspawar Dani 氏

elecung Project⁹の創始者。Surabaya（インドネシア第2都市）で教育者として活動された後、故郷である elecung 村に戻り自身の村の再開発を目指す。現在、バリ島では外国資本が土地所有者になっているという問題が発生している。具体的には、現地の土地所有者が車などを買う資金を得るために、外国人に土地を売る。その後売られた土地の観光開発の結果、バリ昔からの文化が失われてしまっているという問題である。この問題が彼女の故郷である



Aniek Puspawar Dani 氏

elecung 村でも起こっており、観光業によって村の自然が破壊されることや村の伝統が風化されてしまうことを恐れ、プロジェクトの実施を決意した。最終的にはプロジェクトを通じて得たお金で外国資本になってしまった土地を取り戻そうとしている。実際の講義では、彼女の終始太陽のような笑顔とプロジェクトについて相手に伝えようという熱い思いが伝わってきた。

Kelecung 村とは

約 400 名の村民が暮らすバリ島南部の村。農民や漁師、庭師、専門家、起業家など様々な職種、多くの子供たちが住む。山と海に囲まれたこの田園地帯、黒砂のビーチなど非常に美しい自然があふれ、これらの景観は村の観光資源となっている。



elecung 村所在地と村の風景¹⁰

⁹ elecung Project については下記ホームページ情報も参照。 <https://kelecungproject.com/Support-s> (2021 年 6 月 28 日参照)

¹⁰ Google map より <https://www.google.com/maps/place/Project+elecung/@-8.3273734,114.5784089,9/data=!4m5!> (2021 年 6 月 28 日参照)

Kelecung Project とは

2020 年初頭に開始された、elecung 村に持続可能なヴィレッジコミュニティを興すことを目的とした活動である。つまり、一時的に経済を発展させる観光業ではなく、農業を主軸とした開発を、時間をかけて行うことで村の持続的な発展を目指している。また、地元の人の雇用を生み出すことで、コロナ禍で村に戻ってきた人たちにも仕事を提供している。

具体的な活動例

- ・水耕栽培：農作物に対する知識や体力がなくても耕地を耕す方法といった農業技術を村人らに伝授している。elecung 村では昨年度、地球温暖化による異常気象によって多雨で作物の葉が腐ってしまう事象や、作物の虫害や農薬の流出などの問題が発生した。こういった問題に対してどのように対応していくかなどの方法を伝えていくことで農業に関するノウハウを伝えていく。また、農薬に頼らない無農薬食品などの高品質の作物の栽培を目指している。
- ・きのこハウス：雨が多い地域に新しいたんばく質源としての栽培を目指す
- ・たい肥化(廃棄物循環)
- ・川の清掃



elecung Project 具体的な取り組み例写真

Kelecung Eco Village

2015 年にスタートした elecung Eco Village プロジェクトは elecung 村を訪問した人たちに村の美しさや伝統・文化を体験してもらうための観光プログラムである。Aniek 氏は農業を村の中核に置き、農業と伝統を強調したコミュニティベースの観光業を目指している。そのため、地元の人がおもてなしをし、地元の文化・天然資源の保護につなげようとしている。このプログラムでは、地元住民の生活と文化に浸ることができ、実際のバリの現地の人々の生活を直接見るができる。具体的には実際に村で農業体験や伝統的舞踊をみんなで踊ったり、食事を共にすることができる。このプロジェクトでは、観光客だけではなく、現地の人にも自発的に学ぶことでお互いに win-win な関係を築くことができる仕組みを作っている。

3.5.4 日目午前：プロジェクト STOP・Abid Kamalsyah 氏

担当：王滢鵬

はじめに

オンライン研修の四日目に、プロジェクト STOP¹¹のテクニカルオフィサーであるにお話をいただいていた。プロジェクト STOP はインドネシアの環境保護団体の一つである。この文はこの団体の設立背景と活動などについてまとめている。



Abid Kamalsyah 氏

プロジェクト STOP の設立背景

海に漂うゴミの 50%はアジアの 5 つの国から来ていると言われている。それは中国、インドネシア、フィリピン、ベトナム、タイの 5 カ国である。インドネシアは、750 種類のサンゴを含む、世界で最も海洋生物多様性が高い国であるが、毎年約 100 万トンのプラスチック廃棄物が海に流出することが故に、プラスチックゴミに汚染されたサンゴは、病気になる確率が 4% から 90%にまで上昇している。しかしながら、インドネシアのプラスチックの消費量が、廃棄物管理システムの開発スピードを超えて増えているため、強力な汚染対策がなければ、汚染は拡大し続ける。そこで、2017 年、インドネシア政府は、2025 年までにインドネシアの海にあるプラスチックゴミを 70%削減するという確固たる「国家行動計画」を策定することを発表した。プロジェクト STOP は、都市や政府と協力し、クリーンでより公平な廃棄物管理システムを構築することで、このコミットメントの達成を支援することを目的としている。



バリ島における環境汚染の状況

プロジェクト STOP の活動内容

このプロジェクトの中心的なミッションは、東南アジアの海のプラスチック廃棄物汚染に対する循環経済的な解決策を設計、実施、拡大することである。その目標は、廃棄物の価

¹¹ プロジェクト STOP については下記ホームページも参照。 <https://www.stopoceanplastics.com/id/our-approach/#cities>.
(2021 年 6 月 28 日参照)

値を最大限に活用できる、持続可能な廃棄物管理システムを作ることにある。このプロジェクトの特徴の一つは、廃棄物の収集、分別、リサイクル、処理などのいずれかの事業を引き継ぐことがないが、リサイクル製品やオーガニック製品の販売による利益はすべて貯蓄され、廃棄物収集・分別担当者の賃金や、廃棄物管理システムの運営費用に充てるということである。

主な活動内容として、廃棄物の収集・分別作業について、それを改善するための設備を構築・提供する。廃棄物管理システムのスタッフを管理・雇用できるよう、適正な賃金と労働条件で地元の労働者を採用する。多くの人々が廃棄物管理システムを十分に活用できるように、地元のコミュニティと協力して啓発・教育プログラムを通じてコミュニティレベルでの行動変革を促進する。廃棄物管理システムの構築について、プラスチック廃棄物がどのようにして、なぜ環境を汚染するのかを知るための予備調査を行う。そして、その調査結果をもとに、世界中の専門家の意見を参考し、その地域に最も適切な廃棄物管理のシステムをデザインする。また、海に流入するプラスチック廃棄物に対して、都市の処理可能性を評価し、廃棄物の流出量や範囲を測定すると同時に、都市や政府からのサポートを求める。



活動中のスタッフ

Abid Kamalsyah 氏の話

■インドネシアにおける廃棄物管理の現状

最近の調査によると、バリ島では毎年 33,000 トンのプラスチックが海に放出されている。その原因は適切な廃棄物管理サービスがないということにある。海へのプラスチックの流出を食い止めることは、島の観光産業を維持するために不可欠なことであるが、ジェンブラナ島は、人口の多さと廃棄物リサイクルの不足により、毎年 13,200 トンのプラスチックゴミが生産され、そのうち 2,700 トンが海に漏れている。インドネシアの廃棄物管理は厳しい現状にある。

■廃棄物管理の成功の鍵

世界は、海洋プラスチック廃棄物の問題を、持続可能で測定可能な方法で解決しようと奮闘している。その成功の主な鍵は、各地域の状況に応じた取り組み、現場での取り組み、都市ごとと地域ごとの取り組み、そして国家間の連携や国際的なサポートである。これらの取り組みやサポートにより、海洋プラスチック廃棄物の持続可能な削減が実現できる。

3.6. 4 日目午後：株式会社 RECOTECH・坂内智恵氏

担当：花木愛子

株式会社 RECOTECH 組織概要

「テクノロジーでゴミを資源に (Make waste value by tech)」をスローガンに掲げている日本における廃棄物管理のコンサルティング会社である。具体的な活動としては、企業や政府に対しての廃棄物管理のアドバイスや管理環境製品やサービスの販売、ブロックチェーンやアプリを用いた IT solution の開発を行っている。現在、注力されているのが「5. ゴミ資源化システム GoMiCO と MPS システム」で紹介するゴミ資源化システムである。

坂内智恵氏

幼少期をイギリスで過ごし、10 歳で日本に帰国し、福島県で暮らす東日本大震災で被災された経験から、「環境とサステナビリティ」、「プラスチックゴミ」に関して興味を持つようになった。大学時代は環境研究と経営学を二重専攻し、エシカル消費やサステナブルビジネスのあり方に関して分野横断的に研究された。日本のごみ処理方法に関して勉強したとき、そのほとんどを焼却処理に頼っている現状に非常に驚き、現在トレンドとなっている、廃棄物量 0 を目指した「0 waste」に興味を持つ。2019 年に大学卒業後に RECOTECH で活動されている。また、本研修では Founder & CEO である野崎衛氏や大村拓輝氏も参加された。



坂内智恵氏

日本における公害問題 水俣病を例に

日本における水俣病は、化学工場から海や河川に排出されたメチル水銀化合物を、魚、エビ、カニ、貝などの魚介類が直接エラや消化管から吸収して、あるいは食物連鎖を通じて体内に高濃度に蓄積し、これを日常的にたくさん食べた住民の間に発生した中毒性の神経疾患である。熊本県水俣湾周辺を中心とする八代海沿岸で発生し、その後新潟県阿賀野川流域においても発生が確認された。そのほかにもイタイイタイ病や四日市ぜんそくなど日本において廃棄物が正しく処理されていないことによる健康問題が発生していた。それでは、「『廃棄物』とは何であろうか？」廃棄物は正しく処理されなければ、このように健康問題を引き起こすが、「正しく処理することで『資源』として利用できるのではないか？」という思いが坂内さんをはじめとするこの RECOTECH の活動の源となっている。

日本とインドネシアの廃棄物処理の現状

現在、日本では廃棄されたごみの約 20%程度しかリサイクルされていない。また、年間廃棄物処理に約 2 兆円の資金が投入されており、焼却処理が一般的である。一方、インドネシアでは約 55%のごみが埋め立てされている。また、廃棄されている約 20%がプラスチックごみである。持続可能な開発のためには、これらの廃棄物をうまく利用することが重要になってくる。

ごみ資源化システム GoMiCO と MPS システム

GoMiCO はいつでもどこでどれだけのごみが出たかをアプリケーション上で打ち込むことができる。MPS(Material Pool System)は GOMiCO で記録されたごみ情報が集約されるクラウドプラットフォームである。これらのシステムは、顧客を相手にコンサルティングするうえで基となっている可視化 (Visualization) をすぐにできる非常に有用なシステムである。具体的には、GOMiCO で記録されたごみの種類・量・発生時間などの情報が地図上にマッピングされて表示される。こうすることで、一箇所からは少量しか排出されていないごみが、地域で多量に存在していることが「見える化」される。この情報を元にリサイクルチェーンを設計することで、ごみを「資源」として扱うことができるようになる。GOMiCO と MPS によって将来、「見える化」されたデータから資源収集のための最適な物流ルートを自動的に算出し、そして再資源化工場へ効率化に資するデータを共有することで、サプライチェーンのコスト削減を目指すことができる。また、蓄積されたビッグデータから発生予測を行うことで、資源循環の精度の向上が可能である。現在はこれらの構想の実現に向けて、必要情報の要件、分析手法、評価等について様々なステークホルダーと共同で動いているところである。



ごみ資源化システム GoMiCO と MPS システム概要

3.7.5 日目午前：ブミ・セハット国際助産院・Robin Lim 氏

担当：齊前裕一郎

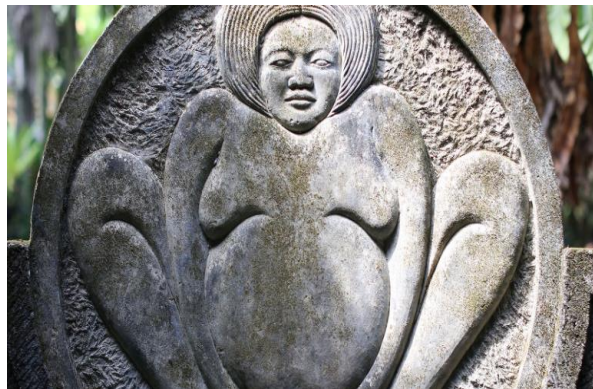
Robin Lim 氏について

5 日目の午前はブミ・セハット国際助産院創設者の Robin im 氏にお話しいただいた。彼女は、フィリピン人の母とアメリカ人で軍人である父を持つ。アメリカを中心に沖縄県やフィリピンなどにて育つ。4 人の子供にも恵まれシングルマザーとして生活していた 34 歳の時に、妹を妊娠高血圧症にて亡くす。また、同時期に友人を亡くした経験を経て、「愛」に生きることを決意する。その後、アメリカで助産師の資格を取得し、バリ島のニュークーニン村へ移住し、ブミセハット国際助産院を設立する。2011 年には C Hero of the year を受賞、2015 年にはフィリピンの大統領から ayanihan peace-builders Award を受賞。彼女の活動は世界的に注目されており、現代のマザーテレサとも評されている。また、その活動を支援するため、世界中から寄付が行われている。

ブミセハット国際助産院

ブミセハットは 1995 年にウブドのニュークーニンという村で非営利組織として設立された。ブミセハットには、「健全なる母なる大地」という意味がある。それから需要の高まりとともにサービスの範囲を拡大し続け、現在では、2つの保健教育センターと助産院を運営している。

特色は、24 時間 365 日無償医療を提供しているということである。また、授乳の方法や産後のガイダンスも行っている。お産は全て自然分娩である。また、ロータス・バースと呼ばれる産後すぐにへその緒を切らず、酸素や幹細胞などが含まれている血液が胎盤から胎児に届けるのを待つという手法を取り入れている。産婦には、マッサージや



ブミセハットのシンボル



ブミセハット国際助産院

鍼灸、産後ケアや授乳サポートなどあらゆるケアを提供している。ブミセハットの活動は多

岐にわたる。ブミセハットは奨学金制度を設定し、助産師や看護師、教員を志す学生を支援している。環境プログラムとして、オーガニック菜園や環境保全運動、リサイクリングに努めている。その結果、ブミセハット本部が位置するバリ島のニュークーニン村はインドネシア国内でも屈指の清潔な村という呼び名を持つほどになった。また、災害支援にも尽力している。2004 年のスマトラ沖大地震では、仮設クリニックにて診察を行い、ハイチ大地震やネパール大地震といった災害時には災害緊急医療支援を提供している。

「愛」に生きる

彼女は困っている人を放っておかない。そのため、埋葬費が払えない夫婦の代わりに埋葬費を肩代わりしたり、仕事がない人には就労支援をしたり、養子にしてほしいと切願されたら、養子にしたりとその活動は助産師の域を超える。これらの活動は全て、困っているお母さんや子供を放っておくことができないという彼女の強い信念から生じている。彼女の願いはシンプルである。1 人でも多くの人が「愛」に生きることである。

3.8.5 日目午後：PKP コミュニティセンター・イブ・サリ氏

担当：三宅萌

初めに

P P (Pusat kegiatan Perempuan) コミュニティ・センター¹²の創設者であるイブ・サリ (Ibu Sari) 氏に、センターでの活動とその意義についてご説明いただいた。インドネシアは女性に対するジェンダー差別が未だ根強く存在する場所であり、離婚した女性はコミュニティにおける阻害を伴う強いスティグマを負わされる。イブ・サリ氏はご自身が離婚を経験され、12 年間御息女にお会いできなかった経緯から、離婚した女性についての精神的・経済的支援の必要性を強く実感されたのである。P P コミュニティ・センターは、IM 女性センターを前身としたインドネシアのコミュニティ全体を支援する施設であり、IM 財団の一部として運営されている。

前身である IM 女性センターは、女性の啓発とバリにおけるジェンダー平等の実現とを目標とする団体であった。そこでイブ・サリ氏は夫からの暴力や離婚によるコミュニティ内の差別に苦しむ女性の保護と支援を精力的に行う中で、問題の解決のためには被害に苦しむ女性個人への救済に留まらず、子供やティーン、男性をも含む「家族」単位、そしてコミュニティ全体への支援を行うことによる構造的な改善を実施することが重要であると考えるに至った。具体的な活動としては以下のようなものが挙げられる。

PKP コミュニティ・センターでの活動

◇教育活動

- ・織物、クラシック／モダンのバリ料理、竹製自転車の製作

バリの伝統的なモチーフや技法を用いたスカーフなどの織物の洋裁を教えるほか、クラシック及びモダンのバリ料理や、地球環境に配慮し再生可能な素材で作られた竹製の自転車の製作が実施されている。



写真左：バリ料理を作る様子／写真右：製作・販売されている織物

¹² P P コミュニティ・センターについては下記ホームページ情報も参照。<https://pkpcommunitycentre.org>. (2021 年 6 月 28 日参照)

・英語、PC

社会的な必要度の高い外国語（英語）の運用能力の向上やパソコンの利用方法についての授業の実施によって、社会的な人材としての価値を高める活動を実施している。

◇ケータリング等販売による経済的自立支援

織物やバリ料理、自転車などはケータリングやオンラインでの販売を行っており、女性の経済的自立を支援している。



写真左：ケータリング販売されているバリ料理／写真右：洋裁を行う様子

◇ヨガやガーデニングによる心身の調整

精神と身体を整えることを目的として、屋外でのヨガやバリの伝統的な植物の栽培を行い、自分自身の内面そして自然との対話を推進している。

◇食料品、金銭、生活必需品の支援と家庭訪問

P P コミュニティ・センターを出て自らの家庭で暮らし始めた人物の家にもイブ・サリ氏は定期的に訪問し、食料品や金銭、また生活必需品に困窮がないかどうかを確かめ、物質的・金銭的な支援を行なう。

支援対象や領域を拡大しながら、イブ・サリ氏は現在も精力的に活動されている。



P P コミュニティ・センターの様子

4. 個人総括

4.1. 見る・考える・創りだす―充実した六日間を通して―

言語文化研究科

王滢鵠

怒涛の六日間の研修を過ぎて、想定外な学びや心境の変化があったように思う。この個人総括では、研修からの学び・発想と今後の目標について述べていく。

研修からの学び・発想

① 異文化コミュニケーションと多文化共生への理解の深化

グローバル化の波によって、今や地球上の何処に住むとしても、何らかの形で異文化や多文化に接することが避けられない時代となっていると言えよう。今回の研修はまさにインドネシア・バリの多様性を通して、多文化へ接触する機会になった。異文化コミュニケーションでは、言語と文化の障壁があるため、誤解がよく生じると指摘されている。現在のグローバル社会において、誤解やステレオタイプが生じるのは当たり前のことかもしれないが、その誤解やステレオタイプを少しでも減らすには、自分自身の調整を常に意識するということは非常に重要である。そしてその調整の要点は相手の文化を尊重することにある。今回の研修を通して、ステレオタイプや先入観で相手の文化と接するのではなく、相手の文化を理解するという姿勢を持つということの大切さを感じた。この姿勢は多文化共生社会の実現にもつながる。日本社会では「多文化共生」という理念が提唱されているが、その「多文化共生」は外来文化への利用と搾取につながり、「誰ひとり取り残さない」という SDGs の考え方に基づいての「共生」ではないという指摘がある。「多文化共生」において解決すべき課題がまだ残っていると考えられる。

② 社会問題の解決に関する視点の獲得

研修では、ジェンダー、貧困、地域活性化などの課題を検討してきたが、研修前はこれらの課題について深く考えたことなく、まるで他人事の気分だった。我々の世代がまさに直面していることではあるが、私のようにそれを「対岸の火事」ととらえる人が多いのではないかと思われる。このような思いが蔓延した結果、最初は小さな火種だったものが急速に大きくなり、昨今の「社会問題」に膨れ上がったのかもしれない。

「社会問題」と言われる多くの物事は、社会問題化されるまでは恐らく「誰かにとっての問題」のようにとらえてきた。「誰かにとっての問題」、つまり、特定の人々だけの問題は多くの人にとっては他人事だろう。他人事である以上、人々の関心がその問題に向かないのは当たり前のことでもある。とはいえ、本来世の中の物事の多くは他人事であり、誰もが他人事に無関心のままであれば、問題の当事者である人々は一生苦しいままである。そのため、

「誰かにとっての問題」を解決するためには他人事である人たちの力が必要となる。それは、他人事である当事者ではない人たちだからこそ、変えられる現実があることだと思う。

他方、研修中はスピーカーの方々の熱意に何回も感銘を受けており、社会課題を解決するには、その課題を何としてでも解決したいという熱意が非常に重要ではないかと思っている。日常生活を送る中で、恐らく誰にでも種のような問題意識はあり、それをどうやって長い期間にわたって発展させることが社会課題の解決に考えるべきことと考えられる。

今後の目標

① 他者とのコミュニケーションについて

研修を通して、自分のコミュニケーション能力に改善の余地がある事を認識した。自分の業務を進め、役割を果たすことだけを考えてしまうと相手への配慮が欠けてしまうことも出てくる。そのため、自分が発信している言葉、姿勢や意欲が相手にどのような影響を及ぼすものかは、常に意識する必要があるだろう。コミュニケーションにおいて、相手を思いやる意識を高めていきたい。また、異文化コミュニケーションでは文法の正しさよりも伝えることのほうが優先されるべきではないかと強く感じた。今後、自分の語学力を運用し、文法を多少間違えても、意思を無事に伝えられる話す力を備えていきたいと思う。

② 研究について

研修では、環境保護、教育、地域活性化など、専門以外の幅広い知識を得ることができただけでなく、他人との意見共有やコミュニケーションを通じて、多様な知見に触れ、自分の考え方をアップデートすることもできた。今回の研修は私にとって、自分の研究の方向性を見つめ直すきっかけにもなった。研究を進めていると、「あなたの研究は何がすごいのですか？」と質問される場面があると予想される。その時に自分の研究についてうまく説明でき、専門外の研究者にも研究の意義を理解してもらえると、仕事を続けてきてよかったとうれしくなる。今後は社会にとって自分の研究はどのような意味を持つのか、社会問題を解決するために何ができるのか、どのような視点で研究を発展させていくのかをしっかりと考えていきたい。

③ 今後の生き方について

研修中の Piter の言葉で「今まで深い無力感を抱いていた頃もあるが、諦めることなく、挑戦し続けることしかできない」であり、非常に心を動かされた。本当にやりたいことに一生懸命奮闘しているスピーカー一方の姿に感服している。今後は自分の将来性を再考し、人生の目標を明確にする。うまくできないと思っても、失敗を恐れず、チャレンジしていく。そして自分がどうありたいのか、自分の価値観や自分が本当に求めている事を把握し、さらにはそれらをもとに自分の感性を見つけて磨いていく。忘れられないことに、他人に思いやる気持ち、そしてそれプラスこの世界を思いやる気持ちを大切にしながら、「自分の人生」を

楽しんでいく。

4.2. 気持ちの変化と FS での学びをどのように活かしていくか

医学系研究科

勝久美月

はじめに

今回の6日間の研修は、自分の研究室では体験できない貴重な経験となった。特に自分の精神面において、大きな変化があったと感じている。私は英語に苦手意識をもっており、講義を受けるというインプット作業とグループワークでのアウトプット作業は、とてもハードルが高いものであり、苦痛な日々が続いた。しかし、繰り返していくうちに、何も思わずにパソコンを開くことができるようになり、壁を1つ越えたような感覚があった。このような精神面や考え方についての学びを振り返り、今後への活かし方を記載する。

今回の学びをどのように活かしていきたいか

① 自分の手の届く範囲に目を向ける

ゲストスピーカーの方々は、自分の目の前の困っている人や問題を何とかしたいという思いから自身の活動をスタートしており、初めから社会という大きなものを変えようと思って動いていたわけではないと感じた。目の前の課題を解決しようとした活動に専門性と呼ばれるものが後付けされたような印象を受けた。

一方で、私にはすでに専門性がある。また、立場によって自分の手の届く範囲は異なることも実感している。私は、看護師経験があり、その立場では患者さんに直接働きかけることができる。しかし、現在の大学院生という研究に携わる者の立場では、患者さんに直接アプローチできないが、看護の根拠を確立することに貢献できる。立場を変えることができるということは贅沢なことかもしれない。ゲストスピーカーの方々と私はこのような点で異なっていると感じ、それゆえに自分は社会に何をすればいいのだろうという疑問が生じているのではないかと考えた。自分の専門性にとらわれずに、目の前の解決すべき課題について考えることの重要性に気づくことができた。

② 自分の専門分野との関連を考える

私の専門分野は、老年看護である。高校生のころから医療・看護のことにしか興味がなく、今回多くのトピックで挙がっていた環境問題に関して、ほとんど興味を持つことができなかった。特定の物にしか興味を示せないことは、自分の中で大きな悩みであり、これまでに様々な情報収集を試してみたが、より詳しく知りたいと感じるものは見当たらなかった。今回の研修では、ゲストスピーカーの方の話聞いた後、必ず自分との繋がりを考える時間があった。最初は、繋がりを見つけることに苦労したが、自分の専門分野の視点を変化させるというコツを掴み、わくわくしたことを覚えている。今回、研修を振り返る時間をたくさんいただき、改めて自分が興味を示す、示さないものについて考えた。その区分は、分野とい

うものではなく、自分とどれくらい結び付けて考えることができるかというものだと分かった。自分事化する方法の一つの方法を発見できたため、今後は、興味の幅が広がるように意識していこうと思う。

③ 物事のポジティブな面を見つけるようにする

ゲストスピーカーの方々全員から画面を通してでも伝わるパッションを感じた。心に残っている言葉はたくさんあるが、最も印象的だった2つについて記載する。

まず、ira氏の“Pandemic is a gift”という言葉だ。COVID-19は、バリの観光業に大きな打撃を与え、ira氏自身もプロジェクトを中断せざるを得なかった。しかし、ira氏はパンデミックのおかげで、考える時間ができたこと、バリが与えてくれた多くの資源に気づき bad ali Farmを始められたと語った。自分も含め、周りに COVID-19 に対してポジティブな見方をしている人は他に知らず、この言葉を聞いた時は衝撃を受けた。

もう一つは、Ibu Sari の“I choose to be happy”という言葉だ。この言葉を聞いて、心が軽くなった。どんな局面においても、幸せになろうとすることが大切であり、幸せになることを選ぶことができる。単純なことだが、私たちは、なぜか難しく考えてしまい、実行することは難しいのではないか。

お二人の言葉を聞いて、物事の見方は、自分自身にかかっているということを強く感じた。どんな場面においても、自分が幸せであったり、ポジティブになれる心の持ち様は、人生を生きていく上で大事な心構えだと思った。

④ 自分の意見を伝える

私は、自分の発言に自信が持てず、変なことを言うと攻撃されるという認識があり、意見を伝えることに苦手意識を持っていた。FS では多くのアウトプットをしなければならず、英語にも苦手意識があり、毎回のグループワークが試練だった。しかし、自分の話をしてみると、グループメンバーは私の話を理解しようとしてくれ、また興味を持ってくれることが分かった。自分が思っているような敵意を向けられることは一度もなく、意見を伝えることにポジティブな気持ちになれた。

また、初日に Tomo さんが「ハイリスク・ハイリターン」という言葉を用いて、チャレンジする大切さを教えてくださった。私も何か自分を成長させたいという思いがあり、グループワークの際に、積極的に司会や、書記などの役割を行うように努めた。最初は上手くできなかったが、できないなりに頑張った。6日間で役割を全うできるようになったとは言い難いが、助けを求めることができるようになった。困っていることを伝え、グループメンバーが手伝ってくれた。自分の状況を伝えないと相手も分からないことをやっと理解した。

終わりに

今まで、対面でないと友人はできないと決めつけており、オンラインでのグループワーク

にネガティブな印象があった。しかし、オンラインでのコミュニケーションの方法を体得し、友人ができた。FS では、多くのチャレンジを行う機会をいただいたが、自分がどう動くかによって結果が変わることを、身をもって体感した。これは、オンラインでの研修であったからこそその学びである。今回得た積極性を今後も活かしていきたい。また、いつかインドネシアを訪問し、友人たちと実際に会えることを願う。

4.3. FS から何を学んだか

医学系研究科

齊前裕一郎

今の自分に何ができるのか

「今の自分に何ができるのか」。FS を終え 3 か月が経った今も頭の片隅で考えていることである。あらゆる諸問題に対してライフワークとして取り組まれているゲストスピーカーの熱量や信念を目の当たりにして、圧倒されたというのが正直なところである。一方、日本という世界的にも恵まれた国で、学生という社会から守られている立場にも関わらず何もできていない自分と対比し、ある種の焦燥感を感じた 6 日間であった。そして、その焦燥感に対して納得解が見つからないまま日々目の前の研究や課題に追われていた 3 か月間であった。看護師として尽力してきた自負はあるが、社会問題という 1 人では到底手に負えない課題を目の当たりにして何もできない自分にある種の苛立ちを感じているともいえる。この 3 か月の間、住み慣れたまちで過ごしてきたが、何も変わっていないように感じる。一方、自分が知らない社会や世界では惨劇が繰り広げられている。FS での経験は、今まで知らなかった、知ろうとしなかった世界の現状を知る機会であった。他方、何もできない自分を顧みることでもあり、ある種の劣等感を感じるという点では苦い経験であった。しかし、「今の自分に何ができるのか」、「何ならできるか」を考えるようになったという点においては必要な経験であったと思う。

専門分野に還元出来ること そこに在ること

私は、少子高齢多死社会が到来している日本において、厚生労働省が提唱する地域包括ケアシステムや地域共生社会の実現に寄与するための研究を行っている。具体的には、急性期病院における看護師を中心とした入退院支援の取り組みの効果に関する量的研究に取り組んでいる。また、将来の変化に備え、将来の医療・ケアについて、本人を主体にその家族等及び医療・ケアチームが繰り返し話し合いを行い、本人の意思決定を支援するプロセスである Advance Care Planning に関する介入研究を企画している。そして、日常生活の中から、自ら起こりうる将来の医療・ケアについて話し合える文化を創出することが私のビジョンである。研究活動を進めていく中で、共生を強いるような政策に疑問を抱いていた。「共生は可能なのか」、「どのような状態となれば共生しているといえるのか」。文化や社会的背景は違うが、FS を通してインドネシアからこれらの解決の糸口を見つけることを 1 つの目標として臨んだ。

共生に関して、FS を通じて学んだ事は、「プラットフォームを持つこと」「何かを強いるのではなく、ただそこに在るのを意識すること」の重要性である。今回のゲストスピーカーに共通していることは、それぞれが居場所というプラットフォームを所有しており、そこで地域住民と交流の機会を得ているという事だ。また、強い信念は胸の中に秘め、対象者に対

しては、何かを強いるのではなく笑顔でありのままを受け入れているのではないかと感じた。

プラットフォームに関しては、ただの空間ではなく、Manaのように訪れたいくなる居心地のよい空間にデザインすることで、自然と人が集まる場所を形成し、そこで、対話を繰り返し、信頼関係を構築していくことで、共生が生まれているのかもしれない。自らの専門分野である人生の最終段階における医療・ケアにおいて、沈黙や反復に重点をおいた援助的コミュニケーションというものがある。人は問題や悩みを抱えている人に対して、どうしても介入をしてしまうが、あえて介入をせずただそこに在ること。そうすることで、相手が「わかってくれる」と思い悩みを打ち明ける。今回のゲストスピーカーたちが作り上げたプラットフォームにはそのような要素があるのではないかと感じた。FSを通じて、自分のビジョンを達成するためにも地域の人が気軽に集まれる居場所を作りたいと強く感じた。

知覚の質を高める

今思えば密度の濃い6日間を過ごした。英語という慣れない言語を相手に、自分なりのベストを尽くしたが、ゲストスピーカーが伝えなかったことを全て吸収できたのだろうか。毎日の振り返りや最終日のプレゼンテーション、FS終了後の報告会で同じ経験をした超域生の発表内容を聞いていると、知覚している内容が違うことに驚いた。知覚は、過去の学習や情報処理過程、そこから得た知恵の集積そのものであり、過去の経験に依存する。そのため、専門領域が異なる超域生が知覚した内容が異なるのは当然である。今回の経験を通じて、これまで形成された自分のフィルターの粗さを認識することができた。貴重な経験をしても、知覚の質が低ければ吸収できるものは少なくなる。そのため、今回の学びを活かして知覚の質を高めていきたいと強く思った。その方途として、知らないことをそのままにしないということに心がけたいと思う。日々過ごしていると知らないことに出くわすことが多い。今までは、興味がなかったに関しては、知らないまま放置していた。そうすることで、知覚の幅を広げる機会を自ら損失させていたのだと思う。スマートフォン1つで世界中と繋がることのできる便利な社会に生きているメリットを最大限活用し、知らないことを知らないままにしないことから始めてみようと思う。

できることから始めてみる

先述したように私は地域の人が気軽に集まれる居場所を作りたいと考えている。その第一歩として、慣れ親しんだ地元を対象とし、自分が何者であるのかを地域に認知してもらうことから始めてみようと思う。具体的には、地域を構成している人やハブとなる場所に出向き、そこにいる人や場所を知る。そこから、対話を重ね地域住民の1人としてその場所に馴染むことから始めてみる。その積み重ねを行う事が、自然発生的に生まれる共生の第一歩なのかもしれない。恥ずかしい話であるが、自分自身人を巻き込んだ共同作業が苦手である。ただ、FSを通じて、なりたい将来像を描くことができた。そして、現実との距離感をつかむこともできた。そのため、苦手といって逃げずに、できることから始めてみようと思う。

4.4. 社会課題とどう向き合っていくのか

工学研究科

花木愛子

人生で初めて6日間に及ぶ「オンライン」海外研修に参加した。私自身、学部生時代に3回ほど中国への海外研修に参加した経験がある。それらの研修では、もともと組まれていた研修プログラムだけではなく、一日の予定終了後の懇親会や現地の学生と一緒に外出し、その国での日常に触れることができた。つまり、実際に現地に訪問すると、いわゆる O と OFF の両方の時間を過ごすことができる。こういった O モード、OFF モードのどちらの交流も続けることで、研修中に仲が深まり、日本に帰国後もコミュニケーションを続けている友人ができた。そのため、今回のオンラインでの研修ではこれらのいわゆる after school の要素や現地の空気感を肌で感じるができなかったことは非常に残念であった。しかし、オンラインの研修であったからこそバリ島をはじめとしたインドネシア全土の高い志を持った同年代の人たちに出会えたと思っている。個人総括では私の感じたことを書き綴っていこうと思う。

オンライン研修だからこそその学び・反省

一番大きなポイントとしては2点あると考えている。一点目は主観的な視点ではなく、客観的な視点で日本とインドネシアの相対化ができたこと。二点目は現地に行くことにこだわらなければ、コロナ禍といった特殊な環境下でも海外研修が可能であるということである。もちろん、はじめにの項では実際訪問する海外研修に関して直接行くからこそその良さについて触れているが、この状況下でも海外研修は可能であるということを知ることができた。

オンライン研修に参加するにあたって、私が一番重要だと感じたことはリアクションである。実際に対面でコミュニケーションをとる際は、かすかな空気感や相手の動きで心情を読む。つまり、こちら側が得られる情報量が多い。しかし、オンラインとなるとネット通信の不具合によるタイムラグや、得られる情報が映像の中での動きと音声だけという少ない情報でのコミュニケーションを強いられる。そのため、相手がどんな人なのか？また、本心はどこにあるのか？などを的確に知っていくことが難しい。そういった状況だからこそ自身の人柄をわかりやすく表現するためのリアクションの重要性に気付いた。これはソーシャルノベーターの方々の情熱に当てられて本当に感じる場所であった。私自身自分が話すときは大きく動くことができていたと思うが、人の話を聞くときにもいわゆる active listening が非常に重要だと感じた。(特に大人数で一人の話を聞くとき)一見、「大勢いるのだから別に私ぐらい…」と思いがちだと思うが、そういう時だからこそ差別化を図っていくことが重要だと感じた。

研修からの学び

① 視点の変化 「社会課題の取り組みや、解決策に関する視点の獲得」

この超域プログラムを履修する前には、「社会課題に対してアプローチをする」ということは、非常に難しく私自身にできることなんてほとんどないのではないかと思っていた。本研修では、自分自身や身近な人が直面している問題を解決していき、その活動が結果として社会課題に貢献しているという現状を知った。つまり、今までははじめから社会課題を解決していくためには？と考えていたが、重要なのはまず始めることだということを学んだ。そのためには、社会課題の設定法として、直接関係がある人(他人)の問題ではなく、自分自身の問題として考える重要性を学んだ。

② 専門性との関連 「自分の専門を活かし、他分野の人と協働する姿勢の獲得」

社会課題を自分事として扱っていくためには自身との接点を見つけることが重要であると思った。この研修では、プレゼンターによる講演の後に必ず、自分自身との接点探しを行っていた。正直、研修中はなんでこんなことをするのだろうと思ったりもしていたが、実際研修を振り返るとその重要性に気付いた。まずは相手を知るための努力として、予備知識を増やすことで知識の幅を広げ、その要素から自分自身と何か関連付けられないかと考えるようにしていきたい。

③ 日本と他国の相対理解 「文化をはじめとする広い知識の獲得」

現地の学生とのディスカッションを通じてまず初めに感じたことは、考えている前提条件が違うのではないかという点である。例えば、廃棄物処理の話をする日本では償却処理が当たり前だし、インドネシアでは埋め立てが主流である。つまり、同じ廃棄物処理という言葉聞いたときにイメージする内容が異なるのである。これはほんの一例であるが自分自身の常識や文化、特に宗教に関して当たり前だと思って会話をすることは非常に危険である。特に、将来海外を視野に活躍したいと考えているため、相手を知ることは非常に重要である。また、相手の話を聞くだけでなく、まずは自身の文化や常識を説明できる言語力を身に付けていこうと考えている。

④ 考え方の変化

当たり前のことであるが、人生は一度きりである。人生 100 年時代といわれる今、人生の約 1/4 を終え、後の 3/4 をどのようにして生きていくのか？自分自身は何に対してやりがいを感じるのか？何を仕事にして生きていきたいのか？死ぬまでに何を残したいのか？自問自答をするようになった。同年代で活躍する参加者やソーシャルイノベーターの話を聞いて、「自分はまだ何かをするには早すぎるのではないか？」といったことはある種の逃げだと感じた。人に話すのは少し恥ずかしい気もするが、ともに過ごす履修生と夢を語り合い、

自身の夢の実現へと尽力していきたい。

今後の目標

① 人脈形成

この研修をきっかけに知り合いになれた人が 10 名以上いる。しかし、なんの努力もなしにこれが半年後、一年後に友人としてつながれる人はほんの一握りだと思う。この研修を通じて私にわかりやすく興味を示してくれた人とは S S を通じて自分から積極的にアプローチしていこうと思う。また、本研修の同窓会などの催しを通じて次はオフラインで彼あるいは彼女たちと話してみたいと思う。

② 研究に関して

この研修を通じてまず初めに感じたのは、プレゼンターの話聞くために予備知識の習得は必要不可欠ということだった。特に日本語ではなく、英語での研修という点も大きいですが、まず特徴的な言葉や背景知識を基に話を聞くと格段に理解度が異なることを知った。ここで得られた気づきは、今後研修だけではなく、学会発表を聴講するうえでも非常に重要となってくる。実際、本当に興味のある発表であれば、予稿を拝読してから発表を聞く。この一見当たり前だと思っている行動をすべての事柄に対して実行していくことは非常に難しい。しかし、この積み重ねが将来の自分自身の糧になるのだらうと気づくことができた。こうやって得た知識を積み重ね、知識の幅を広げていこうと思う。また、相手から知識を得るといった受け身の姿勢だけではなく、自身の専門をわかりやすい言葉で話すことで魅力を伝える練習をすることで、学会発表に向けて練習をしていきたい。さらに文章としてどう書けば相手に正しく正確に伝わるのか？という視点も大切にしていきたいと考えている。

③ 自分自身に関して

本研修を通じた一番の学びだと考えている。今まで、自分が将来何をしたいのか？まだそれを決める段階ではないと思い続け、選択肢を広げるための活動をしていこうとばかり考えていた。しかし、物事を考えていく中では発散フェーズだけではなくその発散を収束していくフェーズが重要であると感じた。そのきっかけになったのは、Aniek の言葉で“ e're going to die, so we have to do what we can.”であり、非常に心を動かされた。自分の人生を振り返ってここで頑張ってたかったと評価できるような生き方をしたいと思う。

最後に

本研修は自分自身を見つめなおすきっかけとなり、自分の将来の方向性を再考できたと考えている。しかし、本研修はあくまでも物事を始めるためのきっかけである。今後は始めたことをどうやって持続させていくのか？が非常に重要だと感じている。まずは、この研修で得たつながりが切れてしまう前にインドネシアに訪問してみようと思う。

4.5. FS 海外研修を終えて

人間科学研究科

三宅萌

初めに

今年度の海外フィールド・スタディ（FS）研修は、昨今のコロナ禍の影響から全面 Zoom によるオンライン実施となった。参加者は主に、事前学習よりお世話になったアース・カンパニーのとも（濱川知宏）さん・あこ（藤本亜子）さんと、インドネシアからの若手起業家九名、超域イノベーション博士課程プログラムの八、九期生十一名、日本とインドネシアからの多様な背景を持つゲスト・スピーカーの皆さま、そして超域の教員・事務員の方々を合わせた総勢三十名近くにより構成されていた。期間は 2021 年 2 月 20 日から 25 日までの計六日間、適宜瞑想を取り入れた休憩を挟みながら連日英語でのミーティング及びディスカッションが行われた。内容は全て社会課題に関わるものであり、ディスカッションは概ねインドネシア側二名、日本側二名の四名ずつが Zoom のブレイクアウト・ルームに纏まる形で進行し、ゲストスピーカーの活動の社会的意義と、活動について自らの専門的見地からいかなる貢献ができるかといったことを主たる議題として取り上げた。

今回の研修は、そもそも六日間オンラインでの海外研修に出続けるということそれ自体が初めての経験であり、精神的・肉体的にも相当の疲労感を覚えるものであった。その上、個人的には学会発表の応募要項の準備や、合評会コメンテータを務めるための研究活動といった研究上多忙な時期に行われたものであり、かつ内容が自らの専門研究（フランス現代思想や美学）と一見かけ離れたものであったことも相まって、中日には研修の終わりが見えず、ひどく苦痛を感じる折々もあった。投げ出さずに最後まで出席し続けることができたのは、その場に背景の異なる人間がいることそれ自体に意義があると信じていたからである。

研修による学び

本節では FS 研修から得た学びを、オンライン実施であったという形式的観点と、社会課題の解決という内容的観点の二方向からまとめる。

① オンライン研修の観点——利点／欠点

今回の研修は昨今のコロナ禍の影響から、web 会議ツールである Zoom や Facebook などの S S を利用した全面オンラインによる実施であった。感染症の脅威からオンライン研修は今後も有力な手段の一つであり続けることは改めて実感され、とりわけインドネシア側の参加者としてインドネシア全土から若手起業家が参加できたこと、また一つの主題に関し午前・午後で日本・インドネシア両国からのゲストスピーカーのプレゼンテーションを拝聴、比較することができたことなど、距離の都合不可能であった参加者方との交流や相対化が叶った点については最大の利点と言えるだろう。

しかしながら、PCの画面を着席し見続けるといった身体的な負荷も合わせ、インドネシア側からの参加者との関係を深めるための余力が残っていなかったことも残念ながら事実である。幅広い経歴の参加者それぞれとのコミュニケーションや関係性の構築に、体力的・心理的摩擦や困難があったことは否定し難い。

勿論、「エネルギーな人は画面越しでもエネルギー」であることは何名かのゲストスピーカーの話聞くにつけ強く感じられたところでもある。ふと思ひ至るのは、一年以上前から始まったテレワークの浸透による運動不足である。状況が現在のような人と会わない・自宅から殆ど出ないものでなかったとしたら、今回のようなオンライン研修における心理的・身体的摩擦はどう変わっていただろうか？困難が増していたか、減じていたかは定かではないが、最低限オンライン化による運動不足がオンライン研修に弊害をもたらすことのないよう気を付けたいものである。

② 社会課題の解決という観点

ゲストスピーカーから与えていただいた知見のうち印象に残ったものは数多くあるが、なかでも大きな不安感と共に記憶に焼き付いたのはインドネシアでの路上生活者の来歴や実情についてであった。「高山の信仰から山嶺に住んでいた人々が、噴火と共に居場所を失い、路上生活を送ることになった」ことや、「路上生活は通常の労働に携わるよりも収入を得られる」こと、また「男性配偶者が女性配偶者や子供が得た収入を自らの所得とし、賭事やアルコール類の購入に充てている」といった状況は、単に個人が信奉するに過ぎない信念を厚かましく振りかざす人間に嫌悪を覚える筆者としても早急に改善「すべき」暗澹たるものに思えた。社会構造上の問題からこういった状況を改善することが容易ではない（明らかに法制度的な改革を要する）ことは述べるまでもないことであろう。しかしゲストスピーカーによれば、なお労を要するのは寧ろ、そのような状況に嵌まり込んでしまっている人々（路上生活者）の精神構造を変えていくことであるという。

大学院で超域プログラムに参加し教員や院生たちと額を突き合わせ話していれば、あたかも全ての人は単線的な、ある何かただしい、実現すべき社会というものを信じており、またこの世界がよくなることは取り組まれるべき課題として自明のものに思える。しかしながら、この発想それ自体が特権的なものであるのではないか。すなわち、教育を受けた人間同士で語られる文化的多様性のみならず、課題を解決することそれ自体が自明な目標や方向性とにある人々をも含む、階級的多様性を視野に入れなければ、社会変革の正統性は担保されないのではないだろうか。精神構造の変革がなされなければ社会変革はなされ得ない（表面的なものに留まり、持続性を持たない）と述べて過言ないだろうが、それは同時に紛れもない暴力でもあるだろう。

とはいえ、そのような縦の多様性を考慮に入れつつ、精神的な水準から社会課題にアプローチしていくということは、かえって社会課題の解決から遠のく余計な苦慮だという立場

もあろう。正直なところ私自身は未だよい解を持ち合わせていないのだが、他の超域生たちと共にこの隘路を抜けることができたらと思う。

今後どのように生かしていくか

私の研究は五十年以上前に出版されたフランスの思想的テキスト、それも芸術に関わる議論の読解にまつわるものであり、例えば工学系の研究の華々しさや利便性、有用性に比べて社会に与える効果は間接的なものに留まるものでしかないと、超域では一種の疾しさに似たおもいを抱いていた。超域に参加しながら自分は何を・なぜ研究しているのか？という問いが、例えば研修中のディスカッションを通して繰り返し回帰していた。筆者に纏わり付く「日本人の」「女性の」「大阪大学の」「哲学・美学の大学院生である」という形容詞のうち自発的に選択したものは最後の一つしかなく、そしてそうであるからにはそれを際立たせるしかない。そして筆者は哲学を・それが重要であるという強い確信のもと研究し始めたのだったが、不思議なことに研修を終えるころ、その選択は妥当であったと納得できたように思えた。思想や哲学は社会変革という観点からも、テクノロジーとは違ったベクトルではあるがしかし強力に働いていることを、むしろテクノロジーや社会活動をしている人から教わったのだった。

哲学的議論が華々しくないように思えるのだとしたらそれは一重に私自身の力不足によるものであり、社会实践までは一繋ぎである筈である。大学の外の、社会活動や実践との関わりを今後考えていくために、陳腐かもしれないが哲学史や美術史上の古典的な議論を追いかけることで自らの知識に厚みを持たせたい。また、GEを通して、芸術実践を行なっている人々（学芸員、演出家や俳優、劇作家、美術祭のディレクター・美術館長など）とのインタビューも行い、キャリアについて視野を広げていきたいと思っている。

この度のFSの研修を通し、「何者であるか」を常に問われているように思っていた。それは私が私自身を否定していることの裏返しであるのかもしれないが、研修を終え自信がついたのか知見が広がったのか、自分でしかいられないこと、そしてそれで構わないということ（思想は技術革新ではなく、新しい価値の創造を可能にするだろう）を得心した。そして哲学や芸術は、実現すべき理想的な社会へのビジョンを与えられる筈である。今後はそのような発想をより実現可能なものへと変換するための知識や発想力を身につけ、発展させていきたい。

4.6. 社会課題を解決する方法に対する理解と自身の取るべき姿勢

工学研究科

鈴木寛太郎

はじめに

このフィールドスタディのオンライン講習を通じて得た学びは二つある。一つ目は社会課題を解決する取り組みの構造をシステム思考の観点から認識できた点。二つ目は、巨大な社会課題に対して自分自身がどのように向き合うべきなのかという点である。その二点について次項でまとめようと思う。

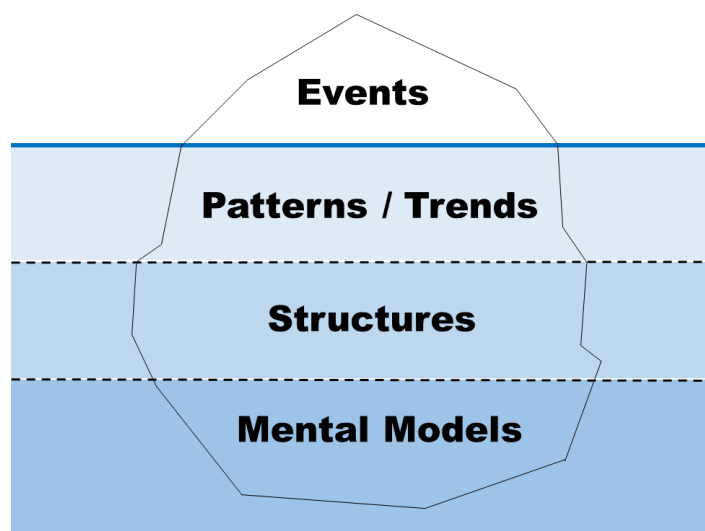
オンライン研修を通じた学び

◆ 社会課題を解決するシステムについて

このオンライン講習では、人口の過疎化、子供の教育、観光資源、ゴミ、男女平等、出産などの多様な話題が取り上げられ、それぞれの課題に取り組む団体からゲストスピーカーを迎えて講演をしていただいた。最初の段階ではそもそもここで登場する PO や GO、ボランティア団体、企業などがなぜ必要なのかという点についての認識が欠如しており、その点を EARTH COMPA の濱川知宏氏による解説を受けて認識することが出来た。今回講演をしていただいた団体は、行政が介入するにはあまりにもローカルな問題や、着手が後回しにされている社会課題に対して、その課題を解決するシステムの基礎を構築する重要な役割を担っている。このような団体によって活動の規模がある程度大きくなり、また課題解決のシステムも確立されることで、当初の活動の主体であった団体から国などのより高い運営能力や大きな資金を持つ団体へと主体が移されるといった発展をする。このような仕組みは常識なのかもしれないが、工学の分野を専攻する自身にとって印象に残る学びとなった。

このオンライン研修を通して触れたゲストスピーカーの持つ情熱の影響力についても触れておきたい。自身の関心が一番高かった海洋ゴミ以外で特に心を動かされた講演が、アニーク氏、イブ・サリ氏、イブ・ロビン氏によるものであった。安易に訪問してしまいそうなリゾート地の現地住民や環境への影響、女性の社会進出のための男性からの独立の重要性、女性の出産の難しさなど、講演を聞いてから 3 か月以上たった今でもふとした瞬間に意識することがある。彼女らの講演の特徴は、他のゲストスピーカーに比べて情熱が表に現れていたという点だと思う。その情熱が聞き手の心に訴えかける側面を持ち、短期間での影響力が強かったと感じた。人の感情に訴えて行動変容を起こすことは一般に簡単なことではない。システム思考で取り扱われる次頁に掲載している冰山モデルでは、人間の感情の層、メンタルモデルが一番深層にあり、そこに切り込むことは難しいとされている。一方で、メンタルモデルにアプローチが成功した場合は意識変化、行動変容を効果的に生むことにつながるのではないかと思うようになった。上記の 3 人のスピーカーが私の心に訴えかけた社

社会課題が、現在私の頭の中にしっかりとインプットされていることがその理由である。これを踏まえ今後私自身が社会課題の解決に関わる際には、システム思考で学んだ冰山モデルにおける構造(Structures)に新しいシステムを導入する方法だけではなく、メンタルモデルへの切り込みも重要だと感じた。しかしながら、メンタルモデルへのアプローチは簡単なことではないとも思う。3人のスピーカーはその人固有の原体験を持っており、これが情熱の原点になっているのだと考えられる。そして、そのような経験はまねできるものではなく、メンタルモデルにアプローチできる情熱的な側面を一般に有するのは難しいのかもしれない。アニーク氏、イブ・サリ氏、イブ・ロビン氏のような活動家はメンタルモデルに切り込める貴重な人物であったのだと思う。メンタルモデルへの切り込みの重要性を認識できた反面で、それを使いこなすことは今のところ困難だという結論に至った。従って、やはり社会課題を解決に導くにあたって一般に取り組むべきはメンタルモデルの上の構造の層へのアプローチなのだろう。



システム思考における冰山モデル

◆ 社会課題に対する自分に取り組むべきこと

全てのゲストスピーカーの講演を通して気が付いた共通点がある。それは、全ての団体が行う社会課題へのアプローチがローカルなことであり、大きな課題に対して小さなことから、小規模で一歩ずつ取り組んでいるという点である。まず目の前の困っている人を助ける、といった姿勢が見られ、自身が社会課外に取り組むべき姿勢としてとても参考になった。海洋プラスチックごみの問題を例に挙げる。レジ袋の使用を抑えることの重要性は感じる一方で、正直なところ日本がとるべき海洋プラスチックごみの問題に効果的な対策は、おそらくレジ袋を断ることではないと疑問を持っていた。そのような疑問を持ちながら、今まではレジ袋の受け取りを断っていた。しかし、このオンライン実習を通して、たとえレジ袋の削減が微量量の変化でも、微量量減れば小さな一歩として全体につながっているという考え

方を持つことが出来、以前よりもレジ袋を断ることに對する意味を感じられるようになった。

また、もう一つ全体の講演の通じて感じたことがある。それは教育の重要性である。子供に對する初等教育だけでなく、自然薬草としてハーブに關する教育、女性の自立のための教育、ゴミ教育、現地文化の教育など大人に對しても取り組まれる教育は、それぞれの持つ課題に内在する負のスパイラルを抜け出すための効果的な方法だということを認識した、教育の持つ強靱さは、将来世代に継続的に教育を続けられる点が挙げられ、社会課題を一世代だけでなく数世代にわたって解決に導くことが期待できる。例えば、ピーター氏の講演では、ストリートチルドレンだった子どもに学びの場を提供し、その子どもが成長して次の世代の子どもを教えるという話をしていた。この話が特に印象的で、教育が将来世代に對しても効果的な取り組みの一つだと強く感じるようになった。

このオンライン実習を通して、自分の出来る小さなことからしっかりと取り組むことで今世界が直面している SDGs で扱われるような課題に向き合おうという意識が確立した。また、自身が専門とする海洋の分野で問題になっているプラスチックごみについて、将来世代への教育的な活動がしたいと思うようになった。

Acknowledgments

I appreciate all organizers who prepared this online workshop, and all guest speakers who gave me new precept to see the social problems. In addition to them, I am grateful to discuss them with Indonesian participants. Finally, thank you, Japanese students, for helping with my English and discussion.

4.7. FS でわかった社会変革の力

人間科学研究科

冷昕媛

はじめに

新型コロナウイルス感染症の影響で、本来フィールドワークを実施する予定であった2019年度の海外フィールドスタディ（FS）研修は渡航することが叶わず、全く残念である。2020年度も同様に渡航が叶わなかったため、6日間、9期生と共にオンライン授業に参加した。地理的制約や世代を超えて、異なる立場の人々に出会えて、交流を深める機会となり、とても素晴らしい経験ができたと感じている。

協力団体である Earth Company のともさんや、ゲストスピーカーたちからインドネシア・バリと日本の抱える社会問題について色々勉強し、貴重な経験をすることができた。そして、コミュニケーションを続けることで、9期生やインドネシアの同年代の参加者との仲を深めることができ、嬉しかった。

オンライン研修からの学び

① 専門性との関連

自分の専門分野は環境行動学で、環境 GO・PO の参加方式の研究をしている。世界的には、グローバルなレベルでの環境問題が深刻化しており、それに対応する取組みが迫られている。今回の研修の中で、日本とインドネシアのプラスチック処理の現状についてプロジェクト STOP と株式会社 RECOTECH の取組みを紹介していただいた。バリ島の適切な廃棄物管理サービスの欠如や、日本のリサイクル率の低さという現状に衝撃を覚えた。同時に、プロジェクト STOP のテクニカルオフィサーである Abid amalsyah 氏から、廃棄物管理システムの構築の過程においては、ステークホルダーである行政機関・専門家・地元の人々を動員して、しかも雇用機会を作ることにも注力したというお話を伺うことができ、非常に興味深かった。また、RECOTECH の坂内さんによる GoMiCO と MPS システムはごみを「資源」として扱い、各所のごみの量を可視化することによって顧客は資源循環のコスト削減に貢献できるという点が非常に興味深かった。これらは、IT 技術の活用や他主体の協働を求めるシステム構築など、環境問題の解決に参考になると感じた。

② 社会課題の複雑性とソーシャル・イノベーション

今回の FS 研修を通じて社会課題の解決の複雑性を知り、地域社会の実情へ即した支援や解決策を模索しなければならないと実感した。ali if e Foundation の活動拠点であるバリ島南部の一部のエリアでは、貧困によって苦しめられている人が多い。当初、自分はシンプルにゴミ山を処理すれば現地もよくなるのではないかと思っていた。しかし、ともさんから「現地では、人々とゴミとは寄り合う関係なので、ゴミは人々の生活を支えている」と話し

ていて、やはり社会課題の解決策は一筋縄ではいかないと改めて感じた。 ali if e Foundation はこどもの教育や母親の就職などを通じて、まさにソーシャル・イノベーションの重要性を伝えていた。

Through the Overseas Field Study online program, I met so many wonderful peers and acquired new experience from the life story of social innovators both in Indonesia and Japan. I wish we can keep in touch and see each other in the future.

5. 謝辞

今回は、COVID-19の影響で現地に行くことができず、オンラインでの研修となりました。しかし、私たち超域イノベーション博士課程プログラム9期生は、自分の研究科では得られない多くの学びを得ることができました。特に、自分とは何者か、社会のために何ができるのかについて考えるきっかけとなりました。

本FSの実施にあたり、多くのご支援をいただきました。Earth CompanyのTomo（濱川知宏）さん、Ako（藤本亜子）さん、June（Andi Junila Aulia）さん、画面越しからでも熱い思いが伝わってきましたゲストスピーカーの方々、FS担当教員の金森サヤ子先生、小川歩人先生、また、坂本恵さんをはじめとする超域事務の方々に感謝申し上げます。私たちのために、多大なるご尽力を賜り、誠にありがとうございました。

インドネシアからの参加者の皆さん、交流できてとても嬉しかったです。いつか必ずお会いしましょう。FSを通して関わっていただいたすべての皆様に心からの感謝を捧げて結びといたします。

6. フォトギャラリー



初日の様子 (2021.02.20)



5 日目の様子 (2021.02.24)



Facebook でシェアしたランチ



Earth Company からの様子